

おしゆん 近頃河原達引
傳兵衛

上之卷

祇園の段

七重八重、けふ九重に匂ひぬる、花の都の川東、祇園の社年ふりて、和光の影もいちじるく、参り下向の人群集、咄し萬歳居合ぬき、えいとうく諸見物、けに繁昌の靈地なり。ものよふの、身はいとどなほ難からめ、瀧口左内と聞えしは、龜山の勘定、役人も心をおくじまの、折目たどしき長羽織、それには似ざる相役の、横淵官左衛門、紛ふ方なき悪者づくり、しばしは爰に立ちやすらひ、「何と官左衛門殿、我々が國元などとは違うて、繁華の地と申す物は、まあ賑やかな事ではござらぬか」「さればく、此度貴殿我等役用にてまかり出で、しばらくの都住居、いつ來ても厭ぬ賑はひ、是を思へば田舎にぐづく暮すといふは、申さばめんくの不仕合せ、何と左内殿、さは思さぬか」「ア、其お詞御尤にはござれども、譬にも申す通り、花はみ吉野人は武士、たとひ田舎にをるとても、心に引けの有るべきや、いざ神前へ」と兩人は、打

ちつれてこそ行きすぎる。人きは目立つ風俗は、祇園の町に名も高き、おしゆんといへる戀知りが、二世の誓を神かけて、願ひは重く足軽く、仲居まじくら歩みくる、向ふの方よりすたくと、來かゝる男が目早くも、「テモマア妹、よい所で行き合うたな」「ホ、オ兄様與次郎様、よい所で逢ひました。案じらるゝはかゝ様の御病氣、別にお變りもないかいな。殊に目さへも不自由なお身、嘸お前のお世話でござんせう」「イヤモウ別に變りはないけれども、いつとてもふらふらと、たゞ引立たぬ母ぢやの病氣、したた物を苦しやるな、追付けさつぱり本復さしやる。こちもけふは此邊へ用が有つた故、序ながらの祇園まゐり、又是から外へ寄つていぬる所もあれば、此頃ゆるりと逢ひに行きませう、さらば」と小短き、羽織打ちふり別れ行く。氏よりも、育ちにつるゝ人心、男ぶりさへ常ならず、來かゝる井筒屋傳兵衛と、遠目に見ても焦るゝ人、それとおしゆんがさし招く、手に走り付き、「そなたも今日は祇園まゐりと聞きたりしが、よい所で行くはした。マア氣を急いたは身請の事、互ひに深いといふ事は、人に知られた二人が中、外へ遣つては此傳兵衛が男も立たず、マア當分百兩ばかり手附をやつて、金の鎖で繋いで置く事を、手代の萬八と喋し合せ、大方に手附けの才覺」「サイナ文でもしらす通り、わたしを身請したがる客が有るのと、ほんにまう氣の揉める事ばかり、どんな出世の身に

成るとて、おまへに別れ片時も、生きながらへる心はない。いとしゃきつゝ苦が有るか、此ま
あ色の悪い事はいな、其の苦もみんなわしゆゑぞ、こらへてくだんせこらへて」と、手を取り
かはし泣きくどく。折りから後へ瀧口左内、夫れと知らずる咳を、聞いてびつくり立ちのく傳
兵衛、「エ、コリヤ左内様、爰へはまあ何時の間に」と、隠れもならぬまじめ顔、左内も片頬に
苦笑、「見れば遊所の女中さうなが、密な用でもこゝは往來、人めに掛れば何のかの、社へ參詣
有るならば、はやうく」と追立つる、詞に否とも云はれねば、おしゆんは別れ行きすぎる。
「ナニ傳兵衛、お身にも兼て存じのとほり、拙者もと關東浪人漂泊の内、僅な好みに御親父喜
左衛門殿の世話をもつて今の主取り、龜山へ有り付いて新參奉公、だんく御前の首尾合よく、
間もなく勘定頭仰せ付けられ、恩顧譜代のめんくとも、肩を並ぶる身の立身、これといふ
も龜山へ、代々出入の喜左衛門殿の世話下されしゆゑと、恩を讐には存ぜぬ此瀧口左内、心に
かよる其方の身持放埒、御國へ出るたび親父の噂、某此度上りしを幸ひに、意見を加へ、心
腹を嬌め直さうと、是まで意見したは幾度か。したが若い時は誰しも有るならひ、とはいふも
の見た所が、よつほど染み付いた體たらく、得手勝手な義理盡に、無分別など出す時は、第
一が親への不幸、世間の人の評判誹、夫れ程の事辨へぬ身でも有るまい。ハテつまらぬ事は

相談もしたがよい。此左内が恩を受けた井筒屋の息子の身の上、聞きすてに致すべきか。とくとく内へお行きやれさ、諸事は晩ほど、早く」と立ち上る。傳兵衛は忝なみだ、「お馴染とて御懇な度々の御意見、用ひませぬ不屈をお叱りもなう、事を別けての今のお詞、中々わるうは受けませぬ、有りがたう存じます。殊にあなたが當お役にお成りなされてより、諸色算用廉直にまかりなり、惣掛や仕入れ方、取りわけて親共が悦び、此脇差の小柄までも、殿様より拜領なしたる程の我々が身の首尾合、これと申すも皆あなた様の御高恩御取成し、さらく徒には思ひませぬ」「ハテ其禮云ふには及ばぬく、身持を改めさへすれば、此左内も嬉しい忝い。ちと又晩など身が旅宿へも來たがよい」と、心つくく瀧口は、宮居をさして別れ行く。あと伏拜み傳兵衛は、涙のうちにもくどくと、「他人の身でさへ目に餘つての意見、親父様の心根をさぞとは知れど、勤の身にておしゆんが貞節、馴染むにつれて可愛さ増し、退くにのかれぬ二人が中、これも因果のひとつか」と、身を悔みたる一人ごと、後の方より官左衛門、しづしづと出で來り、「ヤア傳兵衛待つてゐた」と、聲かけられて泣きが隠し、「これはく官左衛門様、よい所へお出でなされました。此間お頼みなされた鰐の儀、三百兩に付けて有るゆゑ、いよくお拂ひなされますならば、おツつけ是へ仲賣を、手代萬八が同道致して參るは

ず。夫れに付きちとお咄しと申すもマア御無心の筋、委細は萬八に」「オ、サ委しく承知いたしてをる、随分三百兩なら拂ひ申さう。それがしも入用の金子なれど、平日懇意の其方の無心、否といふも何とやら氣の毒、當分百兩は用立ち申さう」「夫れは近頃有りがたい仕合、イヤもうあなたもお手づかへなればこそ、大切な道具をお手放しなさるゝに、餘儀なき御無心申せしに、御得心有つて用事を足すといふも、偏にお蔭」と、禮の八百三百兩の、金ふり擔けいさせきと、中うり勘藏同道して、手代萬八、「ヤアよい所に若旦那、幸ひ官左衛門様もお出でなされてぢや、萬八殿を伴うて参りました」「オイノこちも見える時分と最前から待ち心、マアく此處へ」と居並ぶ茶見世、傳兵衛は懷中より、八橋の鍰取り出し、「コレ勘藏どの、こちの手代萬八とは馴染さうなが、わしが逢うたは此中初めて、其折もいふ通り、出所の確なは、即ちあなたの御所持の鍰、今御相對申して、三百兩で手を打つた」「イヤもう家にこそよれ、井筒屋の若旦那が世話ぢやもの、何の粗末の有るものか、サア是れ代金三百兩」と、包渡せば萬八もろとも、金改ためて渡す鍰、たがひに引き換へ取りをさめ、「幸ひ去歷々の旦那衆が、乞ひ望まる此鍰、買人の有る内急に見せねばならぬ代物、其内お目に」と下うりは、とつかわ急ぎ立ちかへる。官左衛門は二百兩、懷中して立ちあがり、「念のため百兩の預り手形、認めて置きや

れ、身は一先ひとまはいて来る」と、立ち別れよば此方の道へ、来るはたしか揚屋あひやの六左、「オ、イヤ」と傳兵衛主従しゆうじゆう、招まねけば程なく六ぶるもん、「ホ、オ傳兵衛様、このごろ内申うちまします通り、おしゆん様を身請せうと、望のぞみのお客きやくが手附を御渡しなされうと有るゆゑに、則ち其お客が今日は爰へ見えてなれば、今相談さうだんに参りがけ、お笑止せうしな事なれど、何をいうても皆金盡かねづく」「イヤ是六左、おしゆんと深い中なかといふは、人に知られた此傳兵衛、外へやつて立つべきか、時宜しぎによつては生きては居ぬ、また死ぬるからは一人は死しなぬ」「ホ、ウそれく、此萬八が腰押こしおしぢやないが、身請を取り持つ六左衛門、一番はんがけ駈かけにしやつぶりと」「六」ア、氣味きみたが悪いわるはいない、首筋元くびすぢもとからぞつとするはいない。若もししやつぶりと言いはされては、マア好すきの酒も呑のめぬはいない。若もし又急きふにお前まへの方で」「傳」ホ、オ身請せう、おしゆんが身請せう、世話を頼む六左衛門、それ手附金百兩渡す、是で其方そちらの談合だんがふは」「イヤまう何がさてく、お前まへが身請なさるれば、おしゆん様もよろこび、私もしやつぶりを脱のがるよ、何處どこも好よしぢや」と懷中くわいちゆう中より、矢立やたて取り出し手附の證文しやうもん、「まづ此金をちつとも早く親方おやかたへ、傳兵衛様、お出を待つ」と、金請取つて六左衛門、活々として引つかへず。跡へ横淵官左衛門、「サアく證文請取らう、出來て有るか」「ホンニなあ、はつたりと忘わすれてゐた。殊ことにこゝには判はんもなし、手形せうにも矢立の用意は」「ア、これ若旦

那、途中でそりや間に合はぬ、はて今六左衛門から請取つた手附證文、手形するまで百兩の質物」「オ、サく、夫で此場を取りはからひ、手形認め、晩になりと引き換へに來たがよい」「然らば左様」と、件の一札手に渡せば、「身は近邊の兩替屋で、金改めて直に旅宿へ、兩人共跡から」と、別れてこそは歸りける。跡見送つて手代萬八、「官左衛門様のお蔭で、どうやらかうやらおしゆん様は繋ぎ留めたで、此萬八までも大安堵、何とお嬉しうござりますか」「イヤもう嬉しうなうて何とせう、是も皆そなたの働」「ハテお主の爲ぢや物、働かいでよござりやしよか。是からまだ跡金の工面じふめん、これも又此萬八が見んごと働き出してお目にかけよ」「オオ頼むく」と悦こぶ折から、息もすたく六左衛門、大汗になつて駈けもどり、「ア、御人柄に似合ひませぬ、お顔だけに沙汰はすまいが、かうした金を人に掴まし、手附とは横道な」と、皆まで聞かず手代萬八、「ヤア何とお言やる、おらが旦那、似合はぬの横道のと名を立てて、手附の金に何云分、麁忽な事ほざき出すと、その分には濟まさぬぞよ」「是御手代殿、濟ますの濟まさぬのとは、そりや皆此方から言ふ事、今請取つた手附の金、往にがけに念頃中の兩替屋で改めさせたればみな質金」ヤアとびつくり包みをほどき、見れば最前渡した金、「さては中賣勘藏めが、ほつかり一杯喰はしたか、悪い奴」と氣もそどろ、「コレく、萬八、知りや

る通り此間、わが身が世話近付きに成つたあの勘藏、そなたは馴染の事なれば、町所も知つてゐるやろ、引きずつて來て此譯を」「エ、申しわしちやてゝ馴染といふでもなし、お前が直々つばめの相對、マアそれをわしがどうして知るものぞい。根が大枚の金を、粗末に取遣なさるゝから」と、取りあへもせぬ顔付に、傳兵衛は口惜しさ、駈出さんとする所、「コリヤ待て傳兵衛動くな」と、聲をかけて官左衛門、「コナ似せ金遣ひの大騙め、大切な道具の代金、此様な似せ物を授けようとしをつたな、晝強盜の泥坊め」と、たぶさ握んで引倒し、金の包を鼻の間、打ち付けく投付くる、無法の打擲、覺えなき身も言譯なく、齒を喰ひしる無念の涙、「ホ、オ無念でも口惜しくも、手向ひならぬ身の邪ま、似せ金をつかまされ、祕藏の鐐を騙られた上からは、旅宿へ引きずりぶちはなす」と、引立つる手をもぎ放し、ぐつと捻ぢ上げ突飛せば、振りかへつて、「ヤア左内殿、御手前にはマア何時からはへ」「ア、イヤ先刻より様子一々見聞いたした」「フ、ムお聞き有つたら申さいでも知れた科人、引立つるをなぜ留めさつしやるぞ、なぜ邪魔しめさるぞ」「イヤ此瀧口が止めましたは貴殿のお爲」「ナ、ハ、何と」「サアたとへ傳兵衛、まことの騙り質金師にも致せ、左様の吟味せいたうは、當地の御代官所より有るべき事、何ぞや他國仕官の身を持つて、いはれざる吟味仕置、若し代官所より御察度

あらば、云ひわけは何と成さるゝぞ」「サア其の儀は」「如何にお急きなされたとて、龜忽千萬、百兩の手形の出来るまで、取り置かれた手附證文、それなる男へお戻しなされて、彼めを歸して遣はされい」「そりや成りませぬ、拙者が賣つた鍰代の三百兩、誠の金請取るまでは此質物、返す事存じもよらず」「フ、ム、コリヤ成程御尤、傳兵衛いつぞや其方より借用した三百兩、只今急度返済する、此金を鍰代に、官左衛門殿へ進ぜれば、質金遣ひの名を免れるではないかと、サ、サ、教へはせぬがともかくも」と、取り出し渡す三百兩。「イヤ申しあなた様へ三百兩、御用立つた覺えは」「ハテさて物覺えの悪い男」と、目顔で知らせ教へられ、はつと戴く有りがた涙、「是官左衛門様、中賣めにのめくと、騙り取られた八つ橋の鍰、にせ金を取つたは此傳兵衛が誤り、左内様の御蔭にて、三百兩をまどひます。夫れ請取つて最前の、手附けの證文お返しなされませ」「オ、眞の金請取るからは、戻してくれる」と證文投出し、「どう見ても中賣めと、肯き合つた手鍊事、其儘では濟まされぬ、吟味する所で吟味させう」と、底意地わるき詞の針、六左衛門は手附の一札、取りあけて引裂きすて、「ア、氣の毒な様子なれど、我れら風情の何と判斷、どなたも是に」と立上る。左内は聲かけ、「コリヤ、揚屋、ちと尋ねたい事が有る。おしゆんを身請せんといふ客の名が聞きたい」「ハイ其お客は」と、云はんとするを、「コ

リヤぐい六左衛門、何をうたぐぐと、喋らずと早く歸れ」「是はしたりの官左衛門殿、入らざるお世話、コリヤ其客は何國の誰、名は何と」「サア其お方は、どうも此處では申されませぬ」「オ、其はずく、サアもう何にも用はない、ちやつと往ねく」「ハテ其元にはいらぬお構ひ」「イヤ何官左衛門殿、我々國元を出立の砌、遊所へ足ぶみ堅く停止と、御家老中より厳しく仰渡されたは、貴殿にも覺えてござらうかの」「いかにも」「夫にまた彼の者が名を、六左衛門とはどうして御存じ」「サアそれは、アノ物でござる」「ハテとほけた顔めさつても、遊所通ひは明白々々」「ハレ滅相な左内殿、身はついにあの者が所へ入りこんだ覺えもなし、逢ふたもたつた今が初め」「イヤサ言はるよな、初對面のあの者を、たつた今六左衛門と、彼が名を知つて呼ばると筈がない。此趣を本國へ申し遣はせば其元の御身の上、サアそこを朋輩の好みに今日の所を聞きのがしに仕り、其代り傳兵衛が今日のしだら、此場限りに風聽御無用、ナンと御得心か、若し不得心なら、おしゆんが身請の客の名までも詮議しぬいで」「ア、ハ、いや是れ左内殿、何のまあ不得心、傳兵衛はもとより、親喜左衛門は出入の町人、懇意の中、何事も此座切りにさなりく、とかくかやうな所に長居はおそれお先へ參る」と、云ひ捨てに立かへれば、跡に揚屋も立場なく、「こちも長居はおそれ有り、早ういなう」とこそぐいと、我家を指し

て急ぎ行く。苦り切つたる瀧口左内、「ヤア萬八め、儕よう傳兵衛をそより上げたな、此一巻詮議の仕様もあれど、科人も出来、且は諸方の掛り合、何にも云はずに濟してくれる。イヤ何傳兵衛、身も喜左衛門に逢ひながら、同道して立歸らん、いざお行きやれ」と瀧口が、伴ひかへる傳兵衛に、底氣味悪く萬八も、跡に付添ひ立ちかへる。道引ちがへうそくと、來かゝる横淵官左衛門、こなたよりも勘藏が、あらと見付けて立寄れば、萬八も走り著き、「今日は互に上首尾く。シタガ左内めがほくあけかけ、さて冷い目」「オ、サ此官左衛門も氣を冷した、其代りにはまんまと三百兩、冷いな目に逢はぬは勘藏われひとり」「イヤもう出替、お前を待合して、さつきにから其處らあたりをぶらくく、サア八橋の鰐戻します」「オ、此方からも分け口」と、百兩づつを二人に渡し、「さて身が當り前の百兩を、おしゆんが手附に渡し、其内に金の工面、是といふも皆萬八、その方の蔭」「イヤ私も勘藏も、お前の手先を働くは、分口の金が欲しさ。シタガ左内めに穴を見られたから、尻尾の出ぬうち、爰から直に駈落」「オ、サ此勘藏も當分は、影をかくさにや成るまいかい。何に付けても此百兩、ホ、オうまいく」と三人が、立別れてこそ行くすゑは 三重。

揚屋の段

「其元は、主人鹽谷の讐を報ずる所存はないか」「氣も無い事く、家國を渡す折から、城を枕に討死というたのは御臺様への追蹤、時に貴様が、上へ對して朝敵同然と、其場をついと立つた。我等は跡に鯨張つて居たはいかいたわけの、所で仕廻は附かず、御墓へ參つて切腹と、裏門からこそくく、今此安樂な樂しみも貴殿のお蔭、昔の好み忘れぬく、堅みを止めて碎けをれ」「いか様此九太夫も、昔思へば信太の狐、化露していつこん汲まうか、サア由良殿、久しぶりだ御盃」「また頂戴と會所めくのか、さしをれ吞むは」「吞みをれさすは」「狂言のお邪魔ながら、官左衛門様へ申し上げます、御國元より御狀が參りました」「何々國元よりの書狀とや、どれく亭主是へく。フ、ム、イヤもうこりや何でも無い見廻の狀、何事かと思うたに、家來共も氣の附かぬ、爰まで持たせておこすに及ばぬ。はずみ切つた狂言の、大事な所で腰が折れた、残念至極」と拳を握れば、仲居藝子も氣の毒さ、「ホンニもう御家來衆の不粹なから、いらぬ狀おこして、大事な所で間が抜けた。なうおさよ殿、おそめどん」「サイナ、官左衛門様の由良之介はえらいもの、尾上梅幸そこ退けぢや」「ソレく大抵うまいこつちやない」と、笑

ひを嚙みて機嫌取り、「イヤもうお相手になつた此久八、叶ひませぬ。今歌舞妓で刃金を鳴らす三五郎や十藏に、お前の藝がやりたい、いらぬ所に藝者が有る」「フ、ムえらいもので有つたろがの、今宵は身が思ひ付きで、仲居交りのしのぎ狂言、此あとが二蝶々で、娘のお縫が濡髪ぬかみの長五郎、其間の狂言に、我等が踊りに仕らう。サア、何ぞ唄つてくれろ」「マアお一つ上つてさ」「チャットこほれる、おたつ殿替鉚子、それ高調子で、ナント立田川では紅葉を流す、我は君ゆゑ浮名を流す」「イヨ、やんや、どうだ、きついものかく、まだ有らうが」「ホンニもう眞ともく、ホンマニ猿でござります」と、云ひすて遁ぐれば、「にくい仲居め、了簡ならぬ」と荒れ出す。亭主は陰より手すりしたいはう、久八も押止め、「女子共の仇口に腹を立つとは、旦那不粹々々、マア、下に御出でなさりませ。そしてもうおしゆんさまが見える時分」「ホ、オ兎角きやつが事ぢや、揚詰にしてくどけども、帯解かぬ情張者、この横淵も精が盡たれど、そこが意氣張、是非とも傳兵衛と手を切らせ、女房にせにや顔が立たぬ。コリヤ六左、かねて相談して置いた、身請の手附百兩は、すなはち今宵渡さんと持参致いてをる。肝心の狂言は、國の飛脚で間拔がする、踊は女子共にはんでふを打込まると、何とやら氣が減入つて面白ない、座敷をかへて酒にせう」「ホンニそれ、いかう座敷がめいつて

来た、サア、是から奥座敷、娘どもはどつちへいた、おぬひお國くにと呼び立て、亭主ていしゆは伴ともひ奥座敷、勝手の方かたには氣のはらぬ、酒も茶碗ちやわんでお縫ぬいがほろ酔よひ機嫌きげん「おたよどん一つ呑のまんかい」「またおぬひさん酔よはんすなえ、島田しまだ鬚ひげへ蓑みのかけて、髪かみも衣裳いしやうも出来てあるに、狂言の腰こしが折なれ、お前の濡髪ぬれがみの長五郎ちやうごらうを見て残念ざんねんぢやはいな。ホンニ大たぶさの前髪まへがみで、肩振かたふつての身鹽梅かんばい、艶退つやのけて仕手しては無いぞえ」「又おたよどんのいらいちやよ」「ナアニお前をいらひては何處どこぞに有あろぞいな」「誓文せいもんわしや誰たれもない、おしゆんさんにあやかつて、傳兵衛でんべゑ様のやうな面白おもしろい間までも有ありや好よけれど」「何云なんぐもはんすおぬひさん、此おたよが取とつてゐるはいな。ホンニもう此おしゆん様さんもなぜ遅おそいこつちやぞえ、いつそおぬひさん何ぞ彈ひかんか」「アイ、何にせうな、道行みちゆきにせうかいな」「それよかる」「そんなら愛護あいごの若わかぢや聞きかんせ」と、音おとゞやさしく彈ひきなして、明逢あきあひふことは、なほかた糸いとのよるとなく、晝ひるとも分わかぬ閨ねやのうち、枕まくらひとつの床とこの海うみ。おしゆんは戀こひに面瘦おもやせて、餘所よその文句もんくもわが身には、いとと思おもひのまさりぐさ、「おぬひさん今參さんじた」「ホ、オおしゆんさん、二日酔ふつかよひといふ色ぢやぞえ」「アイ二日酔ふつかよひやら三日やら、日さへろくに得覺えおぼえぬ」「ホ、オ道理だうりいな、あの官左衛門くわんざゑもんづらが、おまへのお出いでが遅おそいとて、喧やましう吐ぬかしくさつて成ならぬはえ。そして奥座敷おくざしゆのお客きやくが、お前まへと盃さかづきがしたい、どうぞち

よつとたりと、逢はしてくれと斷つての頼み、おぬひさんも一所にこちへ」と、おたよは二人を伴ひて、入る奥座敷、茶屋の繁昌奥口の、取り締もなく忙しき、折ふしおそめがとつかわと、「おみよどんく」「ホ、オ何ぢや」と勝手から、「何ぢや所か、きりくごんせいなう。大抵や大方ひよんな事ぢやはいなう、奥の客がおしゆんさんを、今宵中に身請するといふはいなう」「ヤア、サアく事ぢやく、どうぞ傳兵衛様へ知らせたいものぢやが」「イヤくそれ知らしたら、どんな事が出来ようも知れぬ、どうぞまあ太鼓持の久八どんに逢ひたいものぢや。あの久八どんは、傳兵衛さんの大分恩に成つた人ぢやといふ事ぢや、それゆゑ傳兵衛様の最良方、呼んでこうか」と二人して、思案かひなき女子同士、折から此方へ出る久八、二人は見るより、「何して居さんすぞい、サアくちよつと思案出して下さんせいなう」「イヤもう、さつきにから思案してゐれど、えい狂言の趣向はない」「オ、しんきそんなき、そんな事ぢや無いはいな、ドレく耳おこさんせ、斯うぢやくはいな」「ヤアそいつは事ぢやく、アノ官左めが身請の手附けくと吐かしくさるに厭果てたに、今宵中に身請するとは、ソリヤ事ぢやく。太鼓持つが役なれば、客の呼ぶ時は何のやうな座敷でも務めねばならぬゆゑ、官左衛門めとも附合うては居れど、此久八は何處までも傳兵衛の味方、こちはもと新町の幫間、傳兵衛の大坂へ出て

ござる時、天満祭で喧嘩仕出し、相手をあやめて、直に牢舎する所を、わしを傳兵衛様の引か
しやつて金出して扱うてくださつて、それから京まで連れてござつて、きつい世話、大恩のある
旦那なれば、どこまでも世話せにやならぬ。イヤ／＼もうそりや事ぢや／＼」「サア、ぢやに
よつて思案了簡をちやつと／＼／＼／＼」「ア、其様に忙しういふと、出かゝる思案も引込ん
でしまふはい、サアカうちや」「どうぢやいな」「有るぞ／＼、こいつはどうであらう」「どう
ぢや／＼」「たかどあの客は此の丹波屋の内の客、爰の亭主が吞込んで、相談の出来ぬ様にちや
ちや入れたらじやみさうな事」「その亭主を抱込みやうは」「チ、娘のおぬひ、むすめのうちで
の立者、きやつ吞込んだら出来る事、ずつと氣の捌けた通り者、頼んだら否とはいふまい」「イ
エイエ／＼そりや悪い、その思案悪い／＼」「おそめ、そりや何んとして」「サイナア、おみよ
どんは知らずか、あのおぬひは傳兵衛さんと譯が有るはいな」「ヒヤア」「それぢやによつて、
おしゆんさんの身請と聞いたたら、ありや喜ぶで有るぞいな。言ひ出して結句悪かる」「ホイし
まうた」サアどうがなと三人が、小首傾け智慧袋、一度に絞る折も折、奥にはおぬひが聲とし
て、「久八さん用がある、何處にぞい」「アノ聲は娘のおぬひ、爰へ來ては話の邪魔二人とも
に此方へおぢや」と、連れて一間へ入るあとへ、おしゆんは、しを／＼立出でて、心も浮か

す氣も澄まず、案じに胸を痛めしが、「互ひに變るな變らじと、言ひ交した言葉を反古にして、奥の客に受出され、傳兵衛さんへ濟むべきか。どうぞ逢ひたい知らせたい」と、おしゆんは涙の獨言、逢瀬もしばし途絶えて、君ゆゑ心痛むなる、傳兵衛が内さし覗きつツと入る。「ナウ傳兵衛さんか、逢ひたかつた」と、抱き付けば取つて突退け、「イヤコレ古めかしいその身ぶり、此頃は官左衛門が揚詰で、おれが事は忘れ果てくさつたろ。あたぶが悪い穢はしい」と、仕掛ける口舌、おしゆんは顔を振り上げて、「恨めしのお言葉、なんの私につゆほども、外へ引かるゝ心は無い。お前に別れたその日より、揚げづめに官左衛門、振つてく振りつけて、内へ戻ればそのあとへ、茶屋からの附け届け、親方様には叱られる、それも誰ゆゑお前ゆゑ、あまりたよりが無いゆゑに、どうぞお顔を見るやうにと、神さままでをせびらかし、無理な願もおまへに逢ひたさ、粹な臺詞も打越して、愚癡に成つたも誰が業ぞ。義理も恥辱も外聞も、忘れ果てゝも忘れぬお前、それを外氣も有るやうに、疑はしくばお前の手にかけて、殺してやいの」と膝の上、身を任せたるおほこさは、里に馴れてもかはゆらし。傳兵衛も心解け、「ホ、オ疑ひはれたもう泣きやんな、堪忍しや。日ごろから悪いと思うてるる官左衛門めが揚詰で、一倍に氣が揉めて、常から外心の無いとは知りながら腹立まぎれ、口へ出るまゝ云うたのぢや。

ホニあの官左衛門めが、祇園での三百兩も、てつきり言ひ合せた騙り事、手代の萬八めを吟味して、事のしだらを質さうかと思へども、その場より彼めも駈落、あの官左衛門めが外の者なら仕様も有れど、何をいうても出入屋敷のお役人、それ故手出しもならず、残念無念を胸を擦つてこらへてゐる」「ホ、オ道理いな、尤ぢや。それ程ぬしの憎んでござんす官左衛門、何しに従はう、帯解くものでござんす。急に話さにやならぬ事がある、マア、こちへ」と手を引いて、しんき辛苦をわくせきと、伴ひてこそ入りにけり。奥から亭主が、「おそめく、おそめは居ぬか」「アイくく」と勝手から、「旦那さん、奥にござるがおしゆん様を身請なさるゝお客かえ」「オイく座敷が淋しい、ちやつと行きや」「イヤ御亭主、それへ参つて御意得ませう」と立出づる、年も六十ぢの親父客、「おしゆんく」と名を聞いて、焦れて来たこのおやぢ、身請して連れて往ぬる氣、今宵中に頼みます。あと金を宿もとへ、いうて遣る間の手つけ金」とさし出せば、「ホ、オこちらにも先約が有れど、こよひ中とあるからは、あなたの方へ首尾なるやうに、相對して参じましよ」と、立上れば此方より、「その身請まあ待つてもらひましよ」「ソリヤマア誰ぢや」「イヤわしでござんす」と聲をかけ、娘のおぬひが狂言仕立の大前髪、肩から歩く大嶋の、襖小短き草履下駄、強さうな顔かはゆらし。「おぬ

ひ、こりや何ぢや」「イ、エわしやぬひぢや無い、濡髪ぬれがらの長五郎ぢや。おしゆんが身請みうけは此ぬれがみがさゝぬ、アイぐつと長五郎が邪魔じやまするのでごんす」「イヤこれ、此方こちが身請みうけして連れていぬるといふおしゆんに、何ゆゑ邪魔じやましめさるぞ」「サイナ身うけを待つてもらひませうといふ譯わけは、あのおしゆんには傳兵衛でんべゑというて、深い間夫まぶがござんす。それを又何してわしが世話せわやくと思はんしよが、其傳兵衛様でんべゑさまにはわしもちつとした譯わけがござんす。それぢやによつて、おしゆんさんと傳兵衛さんの中を裂きたがると思はれては、わしが女が立ちやんせぬ。金輪際こんりんざい世話せわやいて、おしゆんさんと添そはす氣、それ故男伊達ゆゑをとこだてのぬれがみの長五郎になつて頼たのみます。こゝを聞分きりわけて、おやぢさん、マアその身うけ止めて下さんせ、頼たのみました」と立役たちやくの、せりふも所の徳ぞかし。おそめは手を打うち、「あつぱれ女子をなごぢや、富十郎が女伊達をんなだて其處退そこけぢや」と、いそすれば、此方こなたは仔細しさい聞き届け、「此親父このおやぢがよい年としをしての色狂いろぐるひと、一通りはをかしく思おもはしやろが、わしが身うけせうといふも、外ほかの手へ渡わたすまいため。こなさんの其頼そのたのもしい心底しんていを聞くからは、私わしが所存しよせんも打明うちあけて話はなします。聞いて下され、わしは其傳兵衛が親おやでござるはいの」「エ、」ホ、恥はぢを云いはねば理きこが聞えぬが、わしが出生ふんしうは遠州濱松えんしうはままつ、だんく」と身み上あし纏もつれ、とうく果はは紙子かみこの身の上、子供の時覺ときおぼえた東北とうほくの曲舞くまひを、謠うたうて立つた井筒屋かじやちの門口、先の

喜左衛門様は慈悲深い生れ付、エ、悪うも育たぬ風體、不便な事と呼込んで、こちが成長の話
 を聞き、讀み書き算用の出来るを取柄に引上げて手代格、エ、ありがたい忝い、どうぞして此
 恩をと、商賣に憂き身を簞し、一つ呑んだ酒も止め、煙草は固より鼻紙は、紙屑籠から取り遣
 ひ、足袋はかす頭巾きず、十八年が間惣嫁一つ買はどこそ、花の都に住みながら、芝居は何
 をするものやら、親方大事家業大事と精出したが、御一家衆の目に留り、先喜左衛門殿死去
 の後、此跡式を立てかねぬ其方と、家の娘にめあはされ、我名も直に喜左衛門と改めて、大名
 高家のかけやとは、成上つたるわしが果報、其後倅傳兵衛を産み落したは、女房といへど昔の
 主なり家筋と、心一杯介抱したれど、十年以前について往生、わが子ながらも傳兵衛は、此家の
 眞の血筋と、大事々々が餘つて甘く育てしが、親の眼を眩まして、多くの金を傾城買に遣ひ棄
 てる身持放埒、どうぞしたら直らうかと、心を痛め暮せしが、つくづく思案した上で、それ程
 あれが好いた者なら、おしゆんを請出し、女房に持たせてやろ、添はしてやろ、マアどれほど
 染み付いた中かと、やうす見るため親ながら、よい年しての揚屋這入、もし傾城は持たされぬ
 などと選り嫌ひして、心中事の世話物になど作られるやうな、無分別などした時は、井筒屋の
 血筋はとんと絶えはつる、それが悲しいと、また不便が餘つてよりの急の身請、おぬひ女郎の

道を立て、男俠の濡髪に成つての頼もしい今の入譯、忝なうござる、嬉しうござる。そんなら斯うしませう、此身請の一卷は、おぬひとのに預けるから、御世話ながら突込で、世話やいて貰ひませう、是では道も立ちましよがの」「スリヤわたしが言葉を立て、身うけの世話させて下さんすか、エ、忝ないと禮云ふ場なれど、濡髪の長五郎が預りました、請負うたぞえ、必ず今宵中に其身請を」「ホ、オ違はぬ證據、おしゆん女郎をこゝへ呼んで下され」「アイくくく」あひから様子を立聞くおしゆん、傳兵衛は親のお慈悲とありがた涙、おしゆんを連れて出る久八、「思ひがけない親旦那、ざつと捌けた御取捌」「ホンニまう拜んで居やんすおぬひさん」「オ、わしや厭いの、おしゆんさん、世話するは濡髪が役、これでわしも立ちやんした」「ざつと臺詞が治つた、サアくはから奥へ行て酒にせう」「ほんにく旦那さん、さうぢやいな」明兎角浮世はいろぢやえ、騒ぎにつれて打連れて、入るや其夜も後夜近く、奥からそつと横淵官左衛門、様子立聞きこなたへ出で、「あの喜左衛門めが今夜中に、おしゆんを請出しをるとは思ひがけない事、兎角爰の亭主めも、幫間の久八めも、傳兵衛が最良して、身どもが詞は取合はぬ。いつそ親方を直に呼んで逢ひたいとは思へども、三百兩の身請の所へ、此百兩ばかりでは所詮埒の明かぬ事、國許へ云うてやる間もない急な事ゆゑ、金の才覺難儀至極、いつそおしゆんを

人知れず、引つさらつて退くより外の思案はない、さうぢやく」とつぶやく所へ、奥より此方へ出て来るおしゆん、物をも言はず官左衛門、じつと小脇にひん抱かへ、駈出す後へ久八が、「どつこい遣らぬ」と引戻せば、「邪魔ひろぐな」と踏飛す、足首執つて久八が、縁より下へ眞逆様、踏み付けく踏みのめされ、命からぐ官左衛門、這ふく逃けて立歸る。皆々此方へ走り出で、「テモ好いさま好い氣味」と、笑ふ折から走つて来る手代十助、「唯今瀧口左内様より急の御使」「トハ氣遣はし」と喜左衛門、狀箱取上げ、封押切つて讀み終り、「お國許より急ぎの御用筋申し来る、急に談じたき筋あるによつて、只今旅宿まで來いとこの此文體、何御亭主、身請の事を今夜中に埒明けてと思ひしに、今聞かるゝ通の譯なれば、私は是から直に御出入屋敷の御役人の許へいぬる程に、御用筋の濟み次第こゝへ戻つて、明日は早々後金おこして埒明けましょ。傳兵衛は跡に残り、何か相談極めて戻りやいの、皆の衆頼みます」「そんならお歸りなされますか」「おさらばさらばと聲々に、仲居が見送る前垂の、あかりを照し出でて行く。

中之卷

河原の段

名に高き、四條河原も冬ふゆされて、川風寒さむく吹きすぎ、往來ゆききもなみの石いはばしる、水音みづおとまでも夜よるは猶なほ、最いとしん／＼と物凄ものすけく、曇くもる空そらより我胸わがけねも、戀路こひぢに暗くらむ官左衛門、萬八勘藏引き連れて立止たちどまりり、「何でもおしゆんを引ひさらつてと出でかけた所、たいこ持の久八めに邪魔じゃまされてさんざんの仕合、すぐ／＼と戻る所、汝等二人に行き逢うたこそ幸さいひ、今夜中に請出うけたして、喜左衛門めが連れて戻ると吐ぬかしたおしゆん、此河原に待ち合はして、面を隠かくして引つ擔かたけ、何處どこへなりとも退のく了簡れうけん」「オ、チそれよ／＼んす、何か無なしにお前のだんびら、ずばと引き抜ひいて閃ひらつかせたら、他の奴等駕籠を投なつて逃にけるは定じやう、そこで件くだんを擔かたけて退のくのぢや、萬八ぬかるな」「オット合點がてんぢや呑のみ込んだ、もし邪魔じゃまする奴はしらども頼たのんで片付けさす。我等われらにお任せ、ひと走り往いて頼たのんで連れてこう」「コリヤ出來た、そんならちつとも早はやいがよい、走れ／＼」に萬八は、逸足いちし出して驅かけり行く。かゝる工たくみの有ありぞとは、知らぬ井筒屋傳兵衛は、わが家へ戻もどる辻つじ駕籠に、道を急がせさしかよれば、「そりやこそ來たは」とぬつと出で、提灯ちやうちんばつさり切り落おせば、駕籠舁かこども、わつと驚おどろき逃散にげちつたり。「コハ狼藉らうぜき」と駕籠かこよりも、飛こんで出でたる傳兵衛が、顔かほ見てびつくり、「ヤアわりや傳兵衛か」「お前は横淵官左衛門様。ヤアおのれは中賣勘藏め、よくも／＼何時いつぞやは質金にせがねを掴つかましたな。おのれに逢うて此詮議このせんぎがしたかつたはい／＼」「ヤ

アそこな蚊蜻蛉、假令人目無けりやこそよけれ、大きな聲で吐かすなやい。賀金の吟味がしたうても、所詮わが手に合ふ此勘藏では無いはいやい。あた忌ましくしい」と踏飛す、足首取つて拂ひのけ、「心得がたき官左衛門様、かゝる悪者を手に附けて、何ゆゑ此傳兵衛に狼藉をさせ給ふぞ」「ホ、オその子細云うて聞かさん、汝が親喜左衛門が身請して連歸るおしゆんを、待伏して引つさらへ、擔けて退かんと最前から、待つて居た此官左衛門、駕籠に乗つたはおしゆんぞと、思ひの外に傳兵衛、サ、サ、おしゆんは何處へ片付けた、サ、それ吐かせ、ぬかせく」と嵩高なり。こなたは故と逆はず、「イカニモおしゆんは親共が身請を今夜中に致して連歸るべき筈なりしが、御國より急の御用金申し來り、おしゆんが身請は明日と約諾致し置き、親共儀は瀧口様の御旅宿へ先刻參上、これによつて某事も、跡より唯今參りがけ、瀧口様もあなた様と、御判談も成されたから、早々御歸宅然るべし、身も親共が待ちかねべし。心急かれ候へば、御先へ參り候ふ」と、言捨て立つを引き止め、「何處へく、一寸も遣ることならぬ。スリヤ身請は明日へ延びたと、いまくしい、手筈違つた今夜のしだら、己れに知られたからは、此儘では戻されぬ」「オ、さうぢやく、そ奴を還していけ口叩かれては、此方とらが身は破滅、いつそ旦那一思ひに」「オ、サく、この官左衛門も其の了簡。イヤ傳兵衛、此横淵官左

衛門は、汝が出入屋敷の重役人、身が惚れたと聞かば、おしゆんと手を切り離れべき筈なるに、親喜左衛門までが一つになり、身請して内へ引きすり込み、官左衛門に鼻明かせんとは、言語道斷憎き仕方、おのれといふ色男が有るゆゑに、おしゆんめに振附けられた腹いせに、思ふ存分さいなんだ其あとで、息の根止めてこますのぢや。たとへじたばた騒いだとて、所詮埒の明かぬ事、我手に合ふおれぢやない、諦めて泥水喰へ」と、雨の溜りへどうど投げ、「あた忌ま忌ましい」と、蹴平足に踏み附け蹴飛ばしさいなむにぞ、傳兵衛も齒ぎしみ齒ぎり、無念の胸を撫でさすり、「イヤ何官左衛門様、此傳兵衛は卑しい町人、蹴られても踏まれても苦しからねど、此脇指の小柄は、殿様より拜領したる祐乗が作の三正獅子、この小柄を、御家來の身として、土足に掛けても勿體なくもござりませぬか」「ヤア置けくいふな、たとへ以前は殿の物なりとも、おのれが手に渡つたからは、素町人の家の道具、踏んだとて蹴たとつて、何の勿體ない物か、小柄ぐるみに踏みにじつてさいなまん」「オ、此勘藏は元より小柄に掛合ない、おのれがやうな愚鈍な奴は、餓飢ぶみにしてこまさん」と二人して、踏むやら蹴るやら、河原へ投げ付け踏付けられ、「エ、餘りといへば非義非道な官左衛門様、出入屋敷の重役人と、無念を堪へて手向ひせねば、附け上つたる非道の打擲、さほどおしゆんに執心ならば、夙くにも身請はな

されいで、腹立つまゝのぶち打擲、武士に似合はぬ爲されかた」「ホ、オその金が出来くるなら、質金のぐら事騙はせぬはいやい」「スリヤあの八橋の鐐の折」「オ、是なる中賣勘藏、手代の萬八と肌を合せ、三百兩物したのぢやはいやい」さてこそさうと傳兵衛が、無念に無念重る思ひ、睨みつけたるはらく涙官左衛門はせうら笑ひ、「ハ、、、ホ、、、口惜しいか、大聲あけて常吠えろ。腹一ぱいさいなんだ、あとで息の根止めてやる。これが此世の泣納め、泣けくほえろ、大べらほうめ」と立ちかゝり、又踏みかゝれば、もう是迄と官左衛門が、肩先すつぱり切下ぐれば、勘藏は氣も狂亂、「ヤレ切つたは」と呼びながら、一散にこそ遁けて行く。深手ながらも官左衛門、抜合せて切付くれば、ちやうど受けとめ、鉈鏡にちやうちやうく、危かりける有様なり。痛手に堪へかね官左衛門、河原へどつさり倒るゝを、疊みかけて切りつくれば、殘念無念のうめき聲、のた打ち廻るをなぶり斬、數ヶ所の疵に官左衛門、狂死こそ心地よき。をりから来る人影に、既に自害と傳兵衛が、覺悟の刀取直すを、「ヤレ早まるまい傳兵衛様」「マアく待つて下さんせ」と、聲かけられ、「ヤアさういふは久八おしゆん、そなたの事を根に持つて、最前より官左衛門が非道の打擲、堪へるだけとはとこらへしが、どうもかうも成らぬ時宜になり、胸に餘つて手につけたれば、人殺しの此傳兵衛、すぐに此座で死

ぬ覺悟、親人さまの御歎も、さぞかしと思ひはすれど、此期になつては詮なき繰言、不孝の段、よきやうに詫してたも」と、又取り直すを久八は押し止め、「河原に喧嘩があると聞いた故、お前の事が心もとなく、おしゆん様諸共走つて來た。人を殺せば死ぬるとは、尤の事ながら、喜左衛門様や、これなるおしゆん様の、歎かしやる心をも思ひやつて、邊に人の居ぬこそ幸ひ、早う此場を立退いて下され、サア落ちて下され」「久八さんの云はんす通り、喧嘩と聞いて胸騒ぎ、かういふ時宜も有らうかと、脱けて來たこのおしゆん、わたしが事から起つての、人殺しの科何とせう。さういふ事なら死ぬる覺悟は道理ながら、親御さまの歎きや、わたしが悲しさを推量して、どこの山奥いづくの浦にも、遁れるだけは逃け隠れても、どうぞ死なすにくださんせ。死ぬる事ならおまへ一人死なしはせぬ、わたしも共に死ぬ覺悟、おまへを先立てわしが身が、一日生きてゐられうか。親孝行と氣を入れかへ、未練卑怯な心をも、ちつとは持つて下さんせ」と、身を投伏して泣きるたる。「サア親への不孝やそなたの歎き、思はぬにはあらざれど、人を殺して此傳兵衛、存へる所存はない、止めずと放して殺したく」「はてさて聞譯のな、い、おまへの恩に成つた此久八、悪い事云ひはせぬ。たつた一人子のお前を、家の血筋と喜左衛門様の大切がり、後先見すの不了簡も出ようかと、おしゆんさまの身請なさるも、悲しい事

のないためのお計ひ、そこをよう聞分けて、止まつて下さりませ」「それ聞きわけぬにもなけれど」「そんなら落ちて下さりますか」「夫ぢやてゝ此死骸」「ハテ跡は我等にお任せあれ。おしゆんさまも此所に長居して、人目にかゝつては、傳兵衛さまの爲にならぬ、早う内へ戻らせ。序に傳兵衛さま、こつそりと送つてやらんせ」と、言ふにおしゆんも心急ぎ、「サア、サア傳兵衛さん、早う退いて下さんせ。もし死なないで叶はぬ其時は、わたしも一所に死出の旅」「ハテサテおしゆんさま、お前までがそんな事、千の萬のと言葉敷云うてゐるうち隙がある、何をうじく、早うく」と、せき立てられて傳兵衛は、心ならずも遁れ行く。星の光に後影、見える間は延び上り、やれうれしやと始めて吐息つく、折から向ふへ萬八が、しらども引き連れ走り寄り、かくと見るより恟し。無二無三に締めかゝるを、ひらりとかはして身繕ひ、「方人つれたる泥坊めら、久八が手並を見よ」と、左右前後を相手どり、手を盡したる手練の働き、コリヤ叶はぬと萬八はじめ、這ふく逃れにけて行く。勘藏が訴へにて、所の代官捕手引具しかけ來り、「勢州龜山の御家來、横淵官左衛門を切り殺せしと、注進あつて召捕りに向つたり、尋常に繩かゝれ」と、呼はる聲に久八が、科をわが身に引きうけて、捕手の前にどつかと坐し、「人を殺せば覺悟の前、御苦勞ながら」と手を廻せば、早くも掛けたる縛り繩。「囚人引

け「ハア」

堀川の段

おなじ都も世につれて、田舎がましの薄烟、堀川邊に住居して、後家の操も立つ月日、琴三味線の指南屋も、合の手縫れ氣縫れを、保養がてらの藥風呂、煽ぐも我を濫團扇、目さへ不自由な暮しなり。「おつる様、待遠に有らうなア、そして何やらのさらへで有つた、オ、それ烏部山、アリヤじたい心中事、會にでも弾くのなら、お前は女子の方、おしけ様は男の方、掛合ひに唄ふがよいぞえ。ドレ／＼おしけ様の代りに、わたしと掛合に唄ひませう」と、おいてひく手もしをらしき。「唄女肌には白無垢、上に紫藤の紋、中著緋紗綾に黒縹子の帶、年は十七初花の、雨に萎るゝ立姿、男も肌は白小袖にて、黒縹子に色あさ黄裏、二十一期の色盛をば、戀といふ字に身を捨小舟、どこへ取りつく島とてもなし、烏部の山は其方ぞと、死にに行く身の後髪、ひく三味線は祇園町、茶屋の山衆が色酒に、亂れて遊ぶ騒合、あの面白さを見る時は」「イエ／＼しをれがない。あの面白さを見る時は」「あのおもしろさを見る時は」「よし／＼、染どのそなたと某が、去年の初秋七夕の、座敷踊をかこ付けて、忍び逢うた事思ひ出す」「けふ

はマアそこまで、精せいが出るほど有つて、きつう手も廻まはり出した。もうく、何處どこで彈はじきなさつても、恥はづかしい事はない」と、聞いて笑顔えがほのかたをなみ、又明日といふしほに、おつるは立つて歸りける。母を大事と油斷ゆだんなき、身すぎも輕かろき小風呂敷、肩かたに載のせたる猿廻さるまはし、戻もどりはいつも日暮前ひぐれまへ、與次郎いせは息急いきせき門口から、「母者人今戻はじやひじつたぞや」「オ、兄あに戻りやつたか、さぞひもじかる。茶も沸わいて有る、膳ぜんもそこにして置おいた。オ、とくよ戻つたか。今朝けさから子猿こざるめが親おやを尋たづねて喧やかしい、ちやつと傍そばへ遣やつてやりや」「アイくさうでござんしよとも。ソリヤちやつと乳を吞のましてやれ」「イヤナウ與次郎、そなたが孝行にしてたもるにつけ、わしが此の長々の病氣びやうきも、いつ本復ほんぐくする事で有らうと思へば、疲つかれの上に猶なほつかれる。僅わずかな弟子衆でししゆの餘情よせいやわがみの働はたらきで、この養生やうじやうがなる物かと、思へば藥くすりも毒どくとなり、母ではなうて子供の爲ためには、呵噴かしやくの鬼おにと思はるゝ。鬼おには冥途めいずに有るものを、つれなの老の命いのちや」と、身を悔くやみたる咽泣みせびなき、哀あはれにもまたいぢらし。」「ア、コレ母ぢや人、ソリヤ何を云はんすぞいなう。其様にひそやかな身代しんだいぢやと思はしやるか、此間弟子入りした米屋の息子殿むすこから、永々おふくろの煩わづらひで、嘸さへかし勝手かつても悪わるからうと云うて、雪ゆきか花かと申すやうな白米はくまいの仕送りしおく、店々たなぐの旦那衆だんなしゆからは、何なんなと用が有るならば云うておこせ、もし出養生でやうじやうさしますなら、幸ひな隠居所いんきよしょも有るほどにと云うてくる

お方もあり、羊羹、饅頭、生魚、近所隣へさうく裾分も仕られねば、鯛赤貝の類は横町の鮮屋へ卸賣、モ案じる事は微塵もないぞや。それにまだくく氣の毒なは、此家主が此家を居なりに買うてくれぬかと頼まれる。ヤレ厭やのく、ア、あた世話な家持よりは金持が、遙ましても有らうか」と、母に案じを掛けさせぬ、虚八百さへ一貫に、足らぬ節季の言譯を、いふ下稽古やこれなるべし。うそとは知れど老の身は、子に従ふが習ひぞと、機嫌よけに頷き、「オ、それ聞いて落付きました、ガ落付かぬは娘が事、此間も親方が、おしゆんを預けに來て云はしやるには、コレ傳兵衛殿といふ客の事で、ちと内に置かれぬ事が有る、たとへ傳兵衛が尋ねてござろとも、おしゆんが歸つて居る事は、包み隠さねばならぬぞやと、くれぐれも云はしやつた」「サアわしも其入りわけを聞いた故、おしゆんが心根を思ひやり、思はず涙が、ドレマア火を點そ」と柵の隅、こてく取り出す行燈の、火影も漏るゝ暖簾ごし、「おしゆんく」「アイ」と返事もしをくと、思ひ惱し顔容、「マアくこよへ」と小聲になり、「門の戸はかけて有る、見る人も聞く人も無い。方々で噂を聞くに、此間の川原の喧嘩は、殺人はわがみの客の傳兵衛殿なれど、大恩受けた久八と云ふ者が、代に捕られて往たけなが、其場に落ちて有つた小柄が、カノ傳兵衛殿がお屋敷から、拜領した小柄ぢやゆゑ、天命遁れず御詮議最中、なれども、

其夜から傳兵衛の行衛もしれず、其相方の女郎はおしゆんといふ事、お上にもよう御存じで、親方の方へも色々と御詮議が有れど、是も行衛が知れぬと云ひ切つて、今揉めて有る最中ぢやと、とりぐの噂評判、おりやもう聞きたびにびくくする」と、聞くほど迫るおしゆんが胸、其夜の起りも皆わしゆゑ、何處にどうしてござるやら、心もとなさ逢ひたさも、言ふに云はれぬ此場の品、いかどと胸も塞りし。母は一途に娘の可愛さ、「コレおしゆん、何にも案じる事はない、併し突詰めた男氣で、ひよつと此方の内へ來て、刃物三昧でも仕やせまいかと、四五日は夜の目もろくに寢られぬまゝの物案じ、世間にたんと有る格な、心中やなど仕てくれたら、此母は目界は見えず、兄はアレあのやうな臆病者、若しもの事が有つたらば、跡で母はどうせうぞ。袖乞物もらひに歩いてても、そりやもうひつとつも厭やせぬけれど、そなたの體に凶事でも有つたら、おりやモウ直に死んで仕舞ふぞや。若い氣に前後思はず、義理ぢや、イヤ人の落目を見捨ててはと、つまらぬ義理を立てぬいで、年寄の此婆に、つらい目見せてたもんなや」と、可愛さ餘る親心、「ア、なむあみだぶつ」も涙聲。兄もともぐ、「コレおしゆん、今母の言はるゝ通り、何の義理もへちまも入らぬ、退いて仕舞へば赤の他人、またおれも氣にかゝつて、好の飯さへ喉へ通らぬ。母ぢや人の氣休め、儂が腹助けぢやと思つて退いてたも。や、や、頼

む頼む」と正直一遍、母の心と兄の言葉、勿體ないと思へども、切るに切られぬ胸のうち、所詮死なねばならぬ身の、此場を脱けて其上でと、心一つに思案を極め、「舅さん、兄様、お二人のお言葉よう合點致しました。殊に又傳兵衛様、つい一通りで逢うた客、深い譯でもないいな。しかし勤の習ひにて、人の落目を見捨てるを、廊の恥辱とするはいな。とても末のつまりぬ事、わしや得心をさせまして、品よう譯の立つやうに」「イヤく其やうに譯立てると言やつても、あつちに得心せぬ時は、それく、往にがけの駄賃馬で踏殺し、ア、イヤく、無理殺しに仕ようもしれぬ。コリヤ滅多に噛合はされぬ」「オ、兄の云やるとほりぢや、そなたに怪我でも有つては、傳兵衛殿とやらも難儀、思ひ切るのがあつちの爲、わがみに心引かされては、つい捕へられるは知れた事、退狀を遣つたら、そなたの事も思ひ切つて」「切れるともく、遠い國へでも影を置したら、身を遁れまいものでもない」「ソレくむつかしかろともひと筆。兄、硯箱取つて遣りや、サ、早うく」と母と兄、言葉にいなもなき顔を、隠す硯の海山と、重なる思ひのべ紙に、筆の立所の後や前、涙に墨のにじみがちなる胸のうち、書き遣すとはつゆ知らぬ、與次郎が傍から、「コレ其やうに長たらしう書かずとも、つい退きますと書いても濟みさうな事ぢや」「イヤナウ書いたものはあとくまで残る物、男の去狀と同じ事、とつくりと譯

の分るやうに、書いてやるがよいぞや」「アイく、此狀にとつくりと、御合點の行くやうに、あ
 に様、此文お前からお渡しなされて」「よし、此狀さへあれば千人力ぢや、マアく、母ぢや
 人も落著かしやれ」とやかう云ふ内九つまへ、お前も奥でまう寢やしやんせ」「ソレく、今夜
 こそゆつくりと、心よう寢るである。兄もそなたも其處に寢や」と、奥底もなき隔てをば、押
 明けてこそ入りにける。「サアおしゆん、こちらもこゝに往生いたそ」「アイ」とおしゆんが共々
 に、暫し此世を假蒲團、薄き親子の契やと、枕に傳ふ露涙、夢の浮世と諦めて、更けゆく鐘も
 哀添ふ、頃しも師走十五夜の、月は冴ゆれど胸の闇、過ぎし別れの云ひかはし、死なば一所と
 傳兵衛が、忍ぶ姿のしよんほりと、イむ軒は目覺その、槌にこゝと門の戸へ、障る合圖の咳拂
 ひ、聞くにおしゆんは飛立つ思ひ、上る枕もうちはづす。與次郎は側に高舳、心も共に行燈の、
 ともしび吹き消しさし足に、心急くほど明きかぬる、戸口のかげがね表にも、「おしゆんぢや
 ないか」「傳兵衛様、よう逢ひに来て下さんした」と、云ふ聲寢耳に與次郎が恠り、起きると明
 ける門の口、妹が姿も暗紛れ、捉へる袖の振合せ、おしゆんと心得傳兵衛を、無理に引きこむ
 取り違へ、戸口を内からびつしやり引立て、「コリヤこそ突きに來をつたぞ、おしゆん必ず外へ
 出まいぞや。戸口はおれが押へてゐる、門にゐるは傳兵衛ぢや、おのれを入れてよいものか」

と、言ふもがた／＼、胸震ひ、「コレナア兄様、わしや表にゐるはいナ」「何ぢや表にゐるはいな、ヤア其こわ色おいてくれ、そんな事喰ふおれぢやないはい。母ぢや人／＼、傳兵衛がおしゆんを殺しに來たゆゑ、今表へ立て出した。おれ一人では手が廻らぬ、こなたも加勢して下され。加勢／＼／＼」と、うろ／＼／＼／＼うろたへ騒ぎ、母親も、「何ぢや傳兵衛の加勢、ム、まだ外に同類でも有るのか」と、探り寄つたる傳兵衛がそば、「コレ／＼おしゆん、顫ふ事はない、兄や母が付いてゐる、マア氣を鎮めや」と撫でさする、背中の手障り合點ゆかず、「コレ／＼與次郎、どうやらコリヤ娘ではない様な」「ヤア間がり紛れに材木が紛りやせぬか、此方つかまへて居て下されや」と、探る手先に火打箱、がち／＼震ふ付木の光り、「コリヤ妹ぢやない傳兵衛ぢや」「おふくろ、兄御、エ、面目もない此妾」と、猶も小隅に屈みゐる。「コリヤヤイ、其やうにしを／＼して見せて、おいらを欺して、おしゆんを突かうとするのか、其手は喰はぬ」と、懷より一通取出し、怖々ながら傍に寄り、「コリヤ傳兵衛、おしゆんと我と手が切れぬと、科人のわれぢやによつて、妹まで難儀する。それでさつきに妹に得心さして、退狀が書かして有る。コレ是を見い、これぢやによつてモウ／＼／＼、おしゆんが方に殘心氣は離れて有るはい」「ム、スリヤお俊が其のき狀を」「コリヤどき狀ぢや／＼」「エ、其心とは知らず、云

ひかはした詞を誠まことと思うて、迷まようて來たが無念むねんなわい口惜くちをしい」と、齒はを喰くひしばる男泣うら、恨うらを聞くも隔へだる戸口、心はさうぢやないじやくり、「オ、さぞ腹はらが立たと、道理ぢやく、マアとつくりと氣を鎮しづめて、退狀しじやうを見て下さんせ」「オ、それでよい、長う物言ものごとやんな屑くずが出るぞ、傳兵衛、おれが讀よんで聞かしたうても、皆日かいたくおれは祐筆いっぴつぢや、サアく早う」と封ふうじめ切り、突付つぎつけられて目にたまる、涙を拂はらひ、「ナニ書置かきおきの事」「ヤアなんぢや書置」「コレく兄正あに直な、吃驚びっくりする事はない、そなたは無筆私むひつわしは盲者めくら、書置ぢやと讀違よみちがへ、狼狽うろたへさして門へ出で、娘を存分ぶんにせうとの工たくみ。そんな虚言うそは喰くひませぬ、サアくほんまに讀よまつしやれ。コレく與次郎、表おもての娘に氣を付けて、門の戸を明あきやんなや」「オ、吞のの込んでゐる、こゝにはおれが藉へたばり付いてゐる、サア早う讀め。物こそはよう書かね、聞く事は無筆ぢやないはい。サアく讀よんだく」「是までの御養育ごやういく、海山うみやまにも譬たとへがたき親おんの恩、ことさら不自由ふじゆうなる御身のうへ、何とぞ首尾しゆびよう勤つとめを脱のがれ、世を樂らくに過すごさせましはど、せめて少しの御恩報ごおんはうじ、孝行かうかうの片端かたはしにも成なりははんと、そのみ朝夕あけふ祈いのり處、二世までと云ひかはしり、傳兵衛様、思はず此度の御身の難がたも、皆我われゆゑにはへば、今さら見てゐては、女の道立みちだてち申さずは。不孝ふかうとは思ひながら、共に覺悟かくごを極さめり」「母ぢや人、どうやら風かぜが變かはつてきた様な」「サイナアわしも胸むねがど

きどきと、サア／＼あとを讀んで下され」「さきほど傳兵衛様退狀と申して認めしは、此事申し上げたきまゝ、退狀と偽り書遺しり。何事も／＼、先世よりの定まり事と御諦め下され。申上げたき數々は筆にも盡しがたくも、心せくまゝ申し入れり。扱はさうした心か」と、驚く傳兵衛、親子はうろ／＼、「エ、氣遣な、コレ兄や、娘を内へ、早う／＼」と、母があれれば與次郎も、戸口を開くれば走り行く、妹を無理に四人が、顔見合して溜息つき、涙は更に別ちなく、なんと言葉もでん兵衛が、泣く日を拭ひ、「一旦言ひかはした言葉を立て、共に死なうと覺悟して、義理を立てぬそなたの貞節、忘れはせぬ嬉しいぞや。思ひまはせば廻す程、われこそ死なで叶はぬ身、そなたは科のない身の上、共に死んではお二人の歎、命ながらへ亡き跡の、とひ弔ひを頼むぞ」と、言葉にはつと泣出し、「そりや聞えませぬ傳兵衛様、お言葉無理とは思はねど、そも逢ひかゝる始めより、末のすゑまで云ひかはし、互に胸を明かし合ひ、何の遠慮もないしようの、世話しられても恩に被ぬ、ほんの女夫と思ふ物、大事の／＼夫の難儀、命の際に振捨てゝ、女の道が立つものか。不孝とも悪人とも、思ひ諦めコレ申し、一所に死なして下さんせ」と、隠せし剃刀取り直す、「マ、マア待て、待ちをれやい、是で死ぬると命が無いぞよ。コリヤ何の事ぢや、とんと分からぬやうに成つて來たはい。殺しに來たと思う

た傳兵衛殿より、今ではわれが方が手強くなつたぞよ。コリヤマアどうしたらよからうぞ」と、いふもおろ／＼母親も、「オ、さうぢや、我子が可愛い／＼と、子ゆゑの闇の傍ひら見ず、是までおしゆんがお世話に成つた、恩も義理も辨へず、一途に中を引き別けうと、思つた母は義理知らず。賤しい勤する身でも、女の道を立て通す、娘の手前面目ない、そなたの心に恥入つて、何事も云ひませぬ、傳兵衛様と一所にの、コレ死出の道連しやいなう。したがコレ申し傳兵衛様、定めて親御様たちもござりませうが、親の心といふ物は、人間はおろか、たとへ鳥類畜類でも、子の可愛さに變は無いもの、おゆん傳兵衛と言はす氣か。若しやお前が死なしやつたと、親御たちが聞かしやつたら、悲しうて／＼、此世に残つてゐる氣は有るまい。何國いかなる國の果、山の奥にも身を忍び、どうぞ遁れて下さりませ。娘が心に恥入つて、天にも地にも賭替ない、可愛我子を心中に合點して遣る親心、こゝの道理を聞き分けて、コレ拜みます頼みます」と、手を合したる母親の、子ゆゑに迷ふ闇の闇、二人は何と言葉さへ、涙に涙むすほると、血筋の別れ與次郎も、涙の雨の古布子、袖くひしぱりしやくり泣き、「ア、傳兵衛様の歎かしやるも道理ぢや、又おしゆんの泣きやるも道理ぢや、母ぢや人の泣かしやるのも猶道理ぢや、道理ぢや／＼、道理／＼というては、根から葉から何時までも分からぬ道理ぢや。ガコレ二人ながら、

母ぢや人の今の言葉、御合點が参りましたか。エ、コリヤわれも得心してくれたか、合點がいたか。サ、合點したらば、どうぞ此場を立退く分別、しかし其形では人目に立つ、京の町を離れるまで、此編笠に顔隠し、幸の猿まはし、まめで二人が未永う、めでたう女夫に成り遂げる、門出の祝ひに此與次郎が、おはつ徳兵衛が祝言の壽、こなた衆も別れの盃、イヤ／＼祝言の盃」と、祝ふ唄ふも聲低に、「お猿はめでたやな、婿入姿ものつしりと、／＼、コレさりととは／＼ナウ有るかいな、さんな又有るかいな。オ、徳兵衛様ござんせ、餘りこな様が來やうが遅いによつて、おはつ様は顔眞赤にして腹立てて居やんすはいなう。コレお初様、聲様が盃をしたといなう、機嫌直して盃を戴かんせ、コレ／＼／＼戴くなう盃を、さんな又有るかいな。ヤ、コレむこ様、足で盃をさすはあまりつれない、夫では嫁ごが戴かんせぬはいなう。乾反らすとほんまに指してやらんせ、さうぢや／＼、そこでお初がいたゞいた物ぢや、コレいただくなう盃を、さんな又有るかいな。コレ嫁後の晝寝もころりとせい、／＼、ナコレエ有るかいな、さんな又有るかいな。コレむこ様、あまりつれなうさんすによつて、おしゆんよめご様が起きさんせぬはいなう、其處らでちよつと起したり、／＼。エ、コリヤ、コリヤ、ヤイ、コリヤ、さりととは／＼ナウあるかいな、さんな又あるかいな。起きたら互ひに抱き附きやれ、オ、それ

で機嫌が直つたぞ、エ、ゝゝ、有るかいな、さんな又有るかいな、くるりと返つて立つたりな、立つてくれ。コレくく立つたしやませ、次手に日和を見てたもれ、よい女房ぢやに、くく、ナウあるかいな、さんなまた有るかいな。日よりを見たらば落ちてたも、くく、コレさうぢやくく、おさるはめでたやめでたやな」「サアく、きりくく此家^{このや}をさるまはし、まさるめでたう何時迄も、命^{いのち}全うしてたも」と、目は見えねども見送る母、言葉も此世で聞きをさめ、心の中の暇乞、あすの噂となりふりも、簗^{やつ}す姿^{すがた}の女夫連、名を繪草紙にしやうごるん、森を當所に三重^{みへ}辿り行く。

下之卷

道行涙のあみ笠

なまなかに、染めて眞紅の縛^{むす}れ糸、結ほれしより白糸の、昔を忍ぶ世の憂さや、今は浮名もたちばなの、花の姿もいつしかは、萎^しれがちなる目にもろき、露の命と消えに行く、深き契りの傳兵衛は、おしゆんを連れてをちこちの、たつきも知らぬ夜の道、あとやさきなる縛^{むす}れ髪、むすほれそめし縁のはし、人目を包む編笠に、姿は簗^{やつ}し變れども、心の誓紙いつまでも、變らじものと手を取りて、心細くもたど二人、すぎし廓のきぬぐくに、送られしとは引替へて、「我ゆる

かゝる身となりて、智慧も器量も身代も、みな淡雪と消失せて、かはせし言のかずくに、切るにきられぬ中々に、しがらむ縁のいとしや」と、云へば傳兵衛身を悔み、「人々の氣やすめと、猿廻しと姿を變へ、堀川を落ちては來たれども、人を殺した我身の上、存へる心は無い。そなたはあとに生残り、母御へ孝行盡してたも、往んでたも」「コレ傳兵衛さん、そりや胴慾な氣の悪い、かゝさんと兄さんにも、替へぬお前を先立てゝ、生きて居さうなわたしぢやと、思うてかいな愚癡なぞえ。死なば一所と云ひながら、世にも尊き靈場の、森の中にて死ぬるなら、回向のかずに後の世の、闇も照さんこなたへ」と、手を引き立てゝ行く空の、星も逢ふ瀬の天の川、それにはあらで織女の、錦の小路綾もなく、過ぎる向ひにちらくくと、見ゆる火影は誓願寺、嵐にさゆる鐘の聲、「なまいだなむあみだ、世は定めなや去年の秋、閨の隙間の小夜あらし、ア、よい月と眺めてし、今宵は二人月影も、面恥かし此姿、わたしもとは突出の、ふと逢ひ初めし戀の種、エ、儘ならぬ浮世ぞや。おいとしい此姿、わしと云ふもの無いならば、お内儀さんと呼迎へ、中よう添うてござんしよと、思ひ廻せば勿體ない、誓文わたしや未來でも、あなたを退けて浮氣はない、二世も三世も其先までも、どうした因果の縁ぢややら、堪忍して」とばかりにてわつとひれ伏し泣沈む、露の横顔吹きかはし、帯のしやら解け引きしめて、よ

しや歎かじ色ゆるゑの、憂さもつらさも猿廻、おさるはめでたやな、婿入りすがたものつしりとく、コレさりととはくナウあるかいな、さんなまたあるかいな、復とあるまい二人が中、涙耕す畑道、にけ来る二人おひくる二人、挑みあらそふ人影の、夜の目にそれと小さうも、さだかに見えぬ霧の中、見えつ隠れつかくれなき、二人が中は櫻木に、鏤められて唄はれて、色の譯しり戀しりと、仇名残すが亡きあとまで、ほんにせめての思ひ出と、慰められつなぐさめつ、行くも涙の道もせや、二人が命はかなくも、森のこなたに三重著きにける。

聖護院の段

こなたの畑道いつさんに、逃け来る勘藏其あとより、同じく走つて萬八も、吐息つき、「ヤレヤレ危い、ひよんな所で出くはしたる瀧口左内め、アノ又井筒屋の手代十助めも力強、なかく手に合ふ奴等ではない」「オ、サく、何でもおしゆん傳兵衛二人の奴ら、引捕へてくれんと思ひの外の今宵の時宜、さてくひどい目に逢うた」「イヤまう此萬八が體は大方粉になつた、よもや此處まで追つかけても來はせまい。捉まへられてはむづかしい、マア息休め」と芝の上へたばる後の櫛の陰より、すつと出でたる手代十助、隠せし挑灯差揚ぐれば、吃驚しながら顔

打ち眺め、「ヤアおのれは手代の十助ぢやな」「オ、二人とも動くまい、最前惜しい所を取り逃して是まで跡追はへて來た。此處で逢うたが百年目、傳兵衛様の難儀も賢金も、おのれらが皆仕業、片つぱし引つ縛つて、ぐつと詮議を仕抜くのぢや」「ホ、オ斯うなるからは此方も死にもの狂ひ、それ萬八」「オ、心得た、まうやけむちやに締殺せ」「してこい」と、右と左に萬八勘藏、武者ぶりつくを、心得二人を小手がへし、又組付くをすくひ投、挑灯消えて眞闇がり、どれがどれやら當所なく、聲をしるべに掴みつき、投げつ投げられ根競べ、逃ぐれば追つかけ追ひ戻し、堤をすべつてころ／＼、落ちては上りあがれば落ち、命限りと掴み合ふ。斯くともしたより弓張挑灯、火かけにすかして、「ヤア十藏、左内が來た氣遣ない」と、いふ聲聞いて驚く萬八、落ち散る雪駄かい握み、挑灯へばつたり當てれば火は消えて、俄に闇の心地する、烟を傳うて逃け出す一人、何國迄もと追駈くる。こなたの森はしん／＼と、傳兵衛は傍へに座をしめ、「サアこれが我々の露の命の捨てどころ、書きおく事も云ふ事も、もう此の段には皆縁言、二人手に手を取りかはし、死出三途を伴はん、心強く死んでたも」と、涙ながらに勸むれば、お俊も涙に聲曇り、「嬉しうござんす傳兵衛さん、夫があゝの世の樂ぞ、もう今生の言ひをさめ、女房おしゆんと唯一言、いうて殺して下さんせ。わたしもこちの旦那どの、傳兵衛さんと

いふはいな」と、膝に凭れて泣きくどく。「ア、愚な事ばかり、逢初めた其晩から、互にほんの
 女夫ぢやと、約束したに違ひはない。斯く成り果つると知らずして、我命を助けんと、久八が
 身に覚えおき人殺しと成つての獄舎の住まひ憂き苦しみ、親人にお歎かけ、現世の罪に罪重
 ね、來世の苦患も恐ろしい。親の御恩を忘れぬため、家の定紋の小袖は血汐に汚さじ」と、と
 ある傍へに直し置き、「サア夜が明けては恥の上塗り、此傳兵衛を御不惑が餘つてより、そなた
 を請出し添はせんとの親人の御情、思ひがけなく其晩に、事を仕出せし河原の喧嘩、詮方なさ
 に官左衛門を切り殺したる身の災難、不孝に不孝重ねたる我が身の上、是まで不孝の詫言や、
 暇乞には拜むばかり、そなたも堀川の親兄へ、暇乞して禮云や」と、心を付けられ身を震はし、
 「エ、忘れて居たものを、ひよんな事言ひ出して、また泣して下さんすか。宵に別れて出るまで
 も、いかなる國のはて、山の奥にも身を忍び、どうぞ遁れて夫婦となり、無事で暮せとかゝ様
 ののたまひしに、明日は死んだと沙汰あらば、さぞや母様兄さんの、歎き給はんお命も、續く
 まいと案じられ、それが悲しい」と、わつとばかりに取亂し、前後正體なかりしが、やう
 やう涙おししづめ、「アレくくく、向ふのあかいは夜の明けるのぢやないかいな」「イヤ
 イヤあれは在の墓所、亡者を葬る火の光、同じ人と生れても、疊の上で死んだ身は、あとのあ

とまであの様に、葬らるゝもあるものを、都の中でも指折の、町人の子があさましい、見苦しう死んだ體を巷に曝され、あとくまでも、恥をさらしのながら川、水の流といひながら、人間の身は船に似て、心の船長舵取の、悪いばかりで末の世まで、因果の業を果さぬか」と、悔み歎けば諸共に、抱き合うたるもろ涙、森の落葉や浸すらん。はや明がたの鶏のこゑ、こゝには無常の使かと、心せかれて死用意、とりぐ急ぐ其所へ、一文字に駆け来る與次郎、南無三寶と逃出すを、兩手に取り付き、「殺さぬくもう殺さぬぞ。斯うあらうと思つたゆゑ、方と尋ね歩行いた、様子が有る」といふ聲も、息切れしたる後より、瀧口左内喜左衛門を同道し、勘藏萬八に繩をかけ、十助に引立てさせ、「ヤア早まるまいく、横淵官左衛門は役柄にて自由を働き、是まで殿の御用金を掠め遣ひ、多くの御金を引負ひしたる條、明白に死後に露見に及び、不屈たる旨お咎め強く、きやつは死にぞん殺しどく、これなる萬八勘藏も、彼が手さきを働さ、賀金まで遣ひし子細、悪事の段々々々白狀、彼等を直に代官所へ引き渡し、久八が出牢を願ふばかり、安堵せよ傳兵衛」と、言葉の中より喜左衛門、「おしゆんは直に身請して、波風もなく事すんで、治まる家の花嫁と呼迎へん、喜べ」と、聞いてみなく、勇みたち、親のお慈悲とありがた涙、嬉し涙に喜びを、かさね重ねる千代八千代、羽を伸す鶴や龜山に、音は絶

えせぬ瀧口が、仁あり義有り道を立て、運も開くる傳兵衛おしゆん、昔に還る其噂、目出たき
末の代々までも、筆に任せて三重書き残す。

傳兵衛近頃河原達引 終